

第37回 Kyoto演劇フェスティバル

2016年2月6日(土)⇒14日(日)

更なる展開を目指す”京都の冬”恒例の演劇祭！



河原町通が演フェスに向けての祝祭一色に染まります。

Kyoto演劇フェスティバル(演フェス)は、京都府内の劇団・人形劇団が一堂に集う唯一の機会として、また、府民の皆様が演劇文化に触れる機会を提供する事を目的とした地域密着型の演劇祭として昭和54年より休むことなく開催し続けており、「演劇一色に染まる2月の文化芸術会館」と評され、今回で37回目を迎えました。

また、全国に先がけて府民参加型の合同創作劇や朗読劇、短編連続上演などの非常に多彩な特別プログラムを行うなど、「子どもから大人まで楽しめるフェスティバル」として地域に定着し、公立ホールが企画・運営を行う演劇祭として全国

有数の開催回数を誇りつつ注目を集めています。

そして、演フェスが「児童青少年部門」と「一般部門」という、大人から子どもまでの幅広い年代・世代を対象としている土壌を生かし、第35回より行われております特別企画〈演劇クロス世代〉をはじめ、地域を拠点に活動を続ける劇団や団体

などの展示コーナーを設けるなど、「演劇」をキーワードとし、京都を中心により広い地域での演劇活動の普及・発展だけでなく、劇団と観客の「出会いと交流」など、府民の文化活動や生涯活動の活性化も視野に入れ開催いたしました。

第37回Kyoto演劇フェスティバル開催スケジュール

2月6日(土) 一般部門		2月7日(日)		2月11日(木・祝) 児童青少年部門		2月13日(土)		2月14日(日) 特別企画	
グループ空清 《京都市》	劇団 カミヒトエ 《宇治市》	ごちゃまぜ MINIシアターズ 《京都市》	パペット てなもんや 《京都市》	東宇治高等学校 演劇部 《宇治市》					
わいわい エチュード 《京都市》	ミュージカル劇団 ケセラ・セラ 《京都市》	山科麗園 こどものひろば演劇部 ぼっぷ・こーん 《京都市》	きつず☆Kocho 《豊中市》	演劇集団 「広小路」 《京都市》					
劇団 ひいふうみい 《八幡市》	京都放送劇団 《京都市》	まゆともGTS 《京都市》	宇治っ子 朗読劇団☆Genji 《宇治市》	同志社国際中学校 演劇部 《京田辺市》					
劇団「京すずめ」 《京都市》	京都医健専門学校 演劇部 《京都市》	みかんの木文庫 《福知山市》	ミニシアターまる 《長岡京市》	ちゃんばらCLUB 喜怒哀楽 《京都市》					
		京都西陣 創造集団アノニム 《京都市》	児童劇団 やまびこ座 《京都市》	幻灯劇場 《京都市》					

公募公演：一般部門

【2月6日(土)・7日(日)】

公募公演プログラムは、京都府内で継続的に活動を続ける劇団を中心に、参加対象を関西全域の劇団や学生劇団まで広げた、Kyoto演劇フェスティバルの屋台骨を支える中心プログラムです。

「一般部門」は一般成人の鑑賞を対象とした演劇作品の上演を行うプログラムです。

今回は、11団体からの申込があり、申込内容(企画書)だけでなく、プログラム全体のバランスや活動内容などを考慮した結果、8団体(和室2団体/ホール6団体)で一般部門は開幕いたしました。

その内容につきましては、ストレートプレイやミュージカル、朗読劇や

放送劇のほか、近年社会問題となりつつある「介護」をテーマにした作品など、非常にバラエティ豊かなプログラムで開催されました。

また、各出演者につきましても、20代～40代の社会人から60代・70代の社会人OBまでの、非常に幅広い年代・職種のアマチュア演劇人が集うなど、演劇などの創造活動が持つ「生涯学習・生涯活動」としての一面を垣間見る機会にもなりました。

なお、『観客賞』につきましては、前回より「2公演以上の作品を鑑賞された方のみ投票権を有する。」という方法に変更となった事により、従来であればお目当ての劇団公演のみ鑑賞しておられた観客が、ほか公演も積極的に鑑賞されたほか、各公演終了後に

らの参加がありました。

また、参加団体につきましては、地域で様々な活動を行っている児童劇団を中心に、ユニット形式による人形劇から一人で行う人形劇、そして幅広い世代で活動を行っている劇団や子ども達による地域の伝承を題材とした朗読劇団など、非常に幅広い年齢層による参加で、これも一般部門と同じく演劇活動が持つ「生涯学習・生涯活動」としての一面を垣間見る機会にもなりました。

内容についても、完全オリジナルから作品から名作まで、それぞれが非常にバラエティに富んだ作品で、「丸ごと1日楽しめる演劇祭」として、2日間とも客席は大盛況となりました。

一般部門 参加団体



グループ空清



劇団カミヒトエ



わいわいエチュード



ミュージカル劇団ケセラ・セラ



劇団ひいふうみい



京都放送劇団



劇団「京すずめ」



京都医健専門学校 演劇部

実施されました「幕間トーク」なども効果的に行われるなど、演フェスが掲げる劇団と観客との「出会いと交流」に向けて大きな成果があったと思われます。

公募公演 児童青少年部門

【2月11日(祝)・13日(土)】

「児童青少年部門」は児童青少年から高校生ままでを鑑賞の対象とした作品ならびに児童青少年の出演を対象とした演劇・人形劇等の作品の上演を行うプログラムです。

今回は、12団体からの申込があり、一般部門と同様に、申込内容やプログラム全体のバランス・活動内容などを考慮した結果、10団体(和室2団体/ホール8団体)で児童青少年部門は開幕いたしました。※2団体は特別企画へ。

今回は京都市内からの参加以外に、京都府下につきましては福知山市、府外につきましては大阪府(豊中市)か

児童青少年部門 参加団体



ごちゃまぜMINIシアターズ



パペットてなもんや



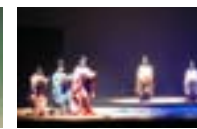
ぼっふ・ごーん



きつず☆kocho



まゆともGTS



宇治っ子朗読劇団☆Genji



みかんの木文庫



ミニシアターまる



京都西陣創造集団アノニム



児童劇団やまびこ座

特別企画「演劇クロス世代」 [2月14日(日)]

「少年少女から青年・大人・熟年(?) までまじわって(クロス!)つながって 今日 は 1 日“だんらん劇場”!”というキャッチコピーのとおり、幅広い年代の観客層に楽しんでいただけるよう、中高演劇部の優秀作品や学生演劇の推薦作品、さらに公募公演からの選りすぐり作品が集結し、演フェスの最終日を盛り上げました。

その内容につきましては、命の尊さを題材にした高校生の作品にはじまり、高齢者による完全オリジナルの創作舞台や、小学生～70代という幅広い世代による殺陣が見どころの劇団など、多彩な内容で上演され、企画意図のとおり、幅広い年代の来場者により賑わい

のある 1 日となりました。

また、特別企画終了後に実施されましたグランドフィナーレにつきましては、公募公演の全参加劇団が舞台上に集合し、第37回の演フェスを締めくくると共に、第3回観客賞の発表・表彰が行われました(劇団ひいふうみいが受賞)。

第40回を見据えて募集要項などを見直すと共に、関連プログラムを充実させ、「出会いと交流」をより積極的に企画化していきました第37回の演フェスは、前回以上の盛り上がりを見せ、次回第38回への期待と共に無事に全ての公演プログラムを終了いたしました。



グランドフィナーレでは演フェス参加全団体が舞台上に集う中、観客賞の表彰式が行われるなど、第37回の演フェスを締めくくりました。

特別企画 参加団体



京都府立宇治高等学校演劇部



演劇集団「広小路」



同志社国際中学校 演劇部



ちゃんばらCLUB喜怒哀楽



幻灯劇場

幕間トーク・交流会など

劇団と観客や劇団間同士の交流をより深め、今後の活動をより充実させていくために表題の企画を実施いたしました。

幕間トーク・アフタートークにつきましては、各公演の終了後の劇団・観客双方の

熱のさめないうちに行われ、ホットな意見が交わされました。

また、グランドフィナーレ終了後に行われました大交流会は、全部門の参加団体が一堂に会し、交流を交える中、お互いを讃え合い、次回の演フェスだけでなく、今後のより良い創造活動の契機となる交流会でした。



公演終了直後の感想や質問など(幕間トーク)



地域や部門の垣根を超えた交流(大交流会)

その他の企画

今回の演フェスより関連プログラムの充実を図るため、2つの企画をプレイベントとして実施いたしました。

まず最初は、演フェスのメイン会場となるホールを使って、参加者が舞台作品をつくりあげる内容の〈合同ワークショップ〉を行いました(参加者:25名/7団体。講師:

中田達幸)。

次に指導者派遣事業(舞台創造アシスト事業)を行いました。この事業は、演技・演出から、その他芝居づくりの様々なところでお悩みの演フェス申込団体に、プロの演劇人・演劇有識者が稽古場まで出向いてご相談を承るスタッフ派遣事業で、演フェス参加の5団体からの依頼があり講師派遣を行い、そのいずれも好評でした。

(アンケートより抜粋)

舞台創造アシスト事業:

- 子どもへの接し方がうまく、子ども達は楽しみながら指導を受けていた。ゲームやミニ座談会等のワークショップを通して、セリフのテンポや気持ちの込め方を学んだ。良い刺激になった。
- 今回初めて指導を受け、目から鱗でした。来年もし出演できたら、まだ指導していただきたい。

第37回Kyoto演劇フェスティバル 開催結果

〈開催期間〉2016年2月6日(土)～14日(日)

〈会場〉京都府立文化芸術会館 ホール・3階和室

〈参加団体数・人数〉23団体・362名

〈参加スタッフ数〉345名(延べ人数)

〈入場者数〉公募公演:一般部門部門 3,575名(幕間トーク等含む)

公募公演:児童青少年部門 3,877名(アフタートーク等含む)

特別企画〈演劇クロス世代〉2,745名(幕間トーク等含む)

合計 10,904名

〈実行委員〉

委員長 椋平 淳(大阪工業大学教授/京都府立文化芸術会館シアターアドバイザー)

委員 岡田尚丈(創造集団アノニム)

河瀬 仁誌(劇団ZTON)

木原アルミ(パーカース)

ごまのはえ(ニットキャップシアター)

沢 大洋(京都学生演劇祭プロデューサー)

高杉征司(NPO法人 京都舞台芸術協会)

田辺 剛(下鴨車窓)

中田達幸(俳優・演出家)

小林洋介(人形劇団京芸)

中村さとし(京都児童青少年演劇協会)

森井有子(ﾈ)

中村昌剛(京都人形劇センター)

小谷 常(ﾈ)

山本範子(京都府文化スポーツ部文化芸術振興課 課長)

下田 元美(京都府立文化芸術会館 館長)

〈ホールスタッフ〉

吉村 昭治(指定管理者 創/舞台担当)

谷澤 庸行(ﾈ /照明担当)

鈴木 英嗣(ﾈ /音響担当)

上田 晶人(ﾈ /事務局担当)

段塚 崇子(ﾈ /事務局担当)

北村 方人(ﾈ /照明担当)

〈運営〉京都府立文化芸術会館

〈主催〉京都府、指定管理者 創[(財)京都文化財団・(株)コングレ共同事業体]

・Kyoto演劇フェスティバル実行委員会

〈後援〉京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都新聞社、朝日新聞京都総局、毎日新聞社京都支局、

読売新聞京都総局、産経新聞社京都総局、日本経済新聞社京都支社、NHK京都放送局、KBS京都、エフエム京都

〈協力〉京都児童青少年演劇協会、京都人形劇センター、NPO法人劇研、京都府高等学校演劇連盟、

京都市中学校教育研究会演劇部会、京都労演